

昭和9年2月1日 第3種郵便物認可
平成18年1月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第37巻第1号



俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

寸

暇

能村 研三

団塊世代と昭和

驕り咲きてふ一茎の曼珠沙華
眼光の鋭さがよし菊人形

脱稿の勢ひ秋灯濃くしたり

峰々に和紙積むやうな冬の雲

今なぜか「昭和ブーム」だそう
だ。戦後に生れ育った、私たち団塊
の世代がやがて定年を迎えるわけだ
が、昭和三十年から四十年頃にか
けては、のんびりしていた時代であ
った。今から考えると当然あるべき
ものが無い時代で、買物にしても車
で乗りつける大型スーパーも無く、
商店街の八百屋や魚屋が盛んで、街
には賑わいと活気があった。そし
て当然そこには人々の絆や温もり、
優しさもあった。私たちは効率性
や便りを得た代償に失ったものは計
り知れない。

私の住む市川にも最近空港貨物の
流通基地であったところが大型店舗
として開業した。ホームセンター、
ドラッグストア、家電製品店、食品
スーパーなどあらゆる店舗が入って
いて、郊外立地のため殆どが車利
用者ばかりである。確かに、専門
的な物も含めて、実に豊富な品揃
えで、便利は便利なのだが、私
たちがやがて年取って車に乗れ
なくなるとは思っている。どう
なるのかと思うことがある。

古書店の照度は凛と秋の暮

登高といふに適ひし真間の山

水槽のやうな半地下暮早し

訳ありの裏坂木の葉時雨かな

数へ日の寸暇を縫ひし旅にあり

初空にルネッサンスの志

これに引き換え、私たちの住んでいる町は、専門店や老舗などが閉じられ、ローンの金融業やパチンコ店の進出により、町の形態が変わってしまった。

市川は昔から文化的な香のある町として、公共の文化施設は整いつつあるのだが、かつてあった骨董屋、古本屋、そして画廊などが、いつの間にか一つ減り二つ減りというのは寂しい限りである。

ただ私たちも寂しがっているだけでなく、もっと自分の町に誇りをもつて良い町になるような努力と愛着を持たなければならぬのだらう。

ものみなデジタル時代になりつつある今、私を含めた団塊世代はやはり温もりのある昭和のアナログ時代がなつかしいのである。

能村 研三



くねり文字 林 翔

新年の句

新年の句には二種類ある。一つは実際に新年になってから詠んだ句だが、発表は大体三月号になってしまふ。もう一つは「新年号に掲載する新年の句」と総合誌などに注文されて、十一月頃に送稿する場合であるが、この場合は未発表旧作か、又は題詠になってしまふ。それでいいのだが、去年三月号の随想「桂信子さんを悼む」に書いたように、氏が元日やまだ半年は死ねませぬと詠んで「俳句」一月号に出したのに、十二月十六日に氏は他界してしまわれたというような例もある。

今年も、「俳句文学館」の一句と「俳句」の八句、「俳句朝日」の十句は年内締切の新春作品であった。但し「俳句朝日」は「新春・近作句を十句」という注文であった。

年末から新年にかけて夫妻旅行をする計画を妻が立てている。富士山が見える旅館だというので、

まだ秋よ秋よと揺れてあかのまま

天へ梯子昇る棟梁厚着して

生しょうに次ぐ病あり雪の小児科医

「頂戴な」愛めぐしお手々に「はい蜜柑」

聖夜劇キリスト様の若いこと

奥様と初めて呼ばれ紅葉映ゆ

紀宮内親王、黒田夫人とならる

先づ浮び出でしは富士や初あかり
と想像で詠み、「俳句文学館」に投
稿した。「俳句」には、

生き生きて又逢ひ得たり初あかり
幸といふ黒きかがやき初靨

ほか六句を、「俳句朝日」には、
こちら向き初愛嬌か初雀

ああ雑煮三百六十日目かな
ほか八句を投稿した。

話を桂信子さんに戻すが、「俳句
研究」十七年一月号の「元日」と題
する十句はすばらしかった。

光一筋そこより今年始まれる
初夢に覚めて覚えのなき齡
が劈頭句と幢尾句である。

林
翔



『波太渡し』

(自選二十句)

向き合つてまだ一語なき初湯父子
すぐあつたまる母の忌の卵酒
舫ひ綱投げて椿の島繋ぐ
男にはさまよひごころ土用波
海風がめくる糶場の初暦
完走証妻へ手渡す冬青空
一信もせず卒業の男旅
鮫鱈を一番星の下に吊る
桐咲いて地熱ぐもりの那須五峰

生涯に一通父の文曝す
雪を掴みてマラソンの汗拭ふ
口あけて待つみどり児へ葛湯吹く
まだぎらぎらとラグビーの敗者の眼
磯開けの明日へ満満たる入日
峰雲へ波太渡しの櫓を鳴らす
いきいきと男が老ゆる初鏡
春光に大き錨を放ちけり
碧空に雄峰連なるほととぎす
佳き日なりけり総身に汗流れ
海鳴りに八犬伝の山眠る

『涼しき嵩』

(自選二十句)

田所 節子

寒垢離のみるみる赤みさす命
神還る魚群は向きを一つにし
骨拾ふこの熱風は父の息
涅槃図の嘆きの裏は繕はれ
洩るる灯に鏡なまめく春の闇
父よ黄泉はこの稔田の明るさか
冬ざくらら咏へ咏へし光かな
子の家族来てより淑気四散せり
児は夢に大空掴み辛夷の芽

野蒜摘み鈴振るやうに土落とす
新世紀の大き初日に児を掲ぐ
師を恋へば天に日を透く朴若葉
麻酔より梅雨流木のやうに醒む
眼帯のなか紫陽花の花盛り
試歩の身は風の花合歓より揺るる
かげろふより走り来し児を抱きとむる
光背となる寒垢離の滝しぶき
春着の児所作に小鈴の音が添ひ
ふたりきりの涼しき嵩を濯ぎけり
秋嶺ゆく光る白点あれが吾子

『丹頂』

(自選二十句)

吉田 陽代

樺 太 は 一 筋 の 紺 夏 岬
丹頂の頭のまぎれずに霏々と雪
白木樫の底紅ほどの帰心あり
眠る子に浄きつむじや根雪くる
身に入むや北の窓には北の山
凍玻璃戸太陽あをくありにけり
歩くとは退らざること雪しまく
地吹雪を抜けきりし目を大きくす
枯葦原これよりは雪まかせなる

春暁の指あたたかく目覚めけり
紙風船たためる不思議たたみけり
朝市や菖蒲背負籠のまま据ゑて
みどりごに月日はじまる新暦
眠らむと山々は手をつなぎあふ
言葉生まるるやうに雪野に日が差しぬ
輪 標 つ く づ く 人 間 二 本 足
矩形美しテニスコートは無垢の雪
「油断すな」夫の声とぶしばれ坂
のぼりきつたる満月のゆらぎなし
クリスマス逢瀬にも似て老ふたり

『白卓布』

(自選二十句)

楠原 幹子

凍滝の春への助走ふた三筋
居たのかと夫に点さる花疲れ
年寄が掃きをり秋の祭あと
子が話すまで待つことに椿の実
真つ青な海まつさらの麦稈帽
かけくれし絹マフラーに葉巻の香
錯綜の轍やあをき雪あかり
ふらここや恋の初めの小いぢわる
百畳に僧のすり足涼新た

ちよつと邪魔隣のお洒落な春帽子
雲の峰島から島へ橋吊られ
微醺も白桃に紅さしたるは
「ぼくはねえ」師の声いまも夕朧
釣れてゐるふうでもなくて暖かし
脳細胞音なくこはれ春の霜
風五月木綿が性に合つてをり
白南風の波恍惚と岩を撫す
蟬生れて飴色鑄型のこりけり
雨の奥雨より速く滝落つる
一斉といふは恐ろし彼岸花

『半球体』

(自選二十句)

細川 洋子

心音に似たる噴井のありにけり
明易の街現像されてくるごとし
いたづらな眼だけを残し日焼せる
大地てふ半球体へ威し銃
着膨れて津軽じよつぱり通しけり
逆上がりして春愁の撓みけり
思ひ出すきつかけからす瓜の花
大枯野円周率の果てしなき
素のままにあり十月の手と足は

米を研ぎ手の温みきし神迎
まん中に心臓のある懐手
秋の灯の誰かしらゐて実家なる
色鳥を出す青空の手品かな
ものの芽に触れきし指の漣す
野分あと萩の重心変りけり
なるやうになると言ふ母藻の咲けり
胎動の著けき夜なり群れ螢
見るよりも見失ふもの雪螢
合掌家捻^ね苧^その締めまりも秋の声
汗ばみて生業屈むこと多し

年間二十句

主宰選

工藤 進

句碑撫づる百の掌の供花秋惜しむ
掛大根翳を濡らしてゐるやうな
冬あたたか干潟に百の羽音して
大旦身ぬちに導火線秘めて
耳たぶのやうな鶏冠雪降り来
啓蟄やふくらみはじむ熱気球
枕辺にさくら貝置く海を置く
桃の日や大和に女帝待望論
啓蟄や蜂蜜の壘逆さ立て

花吹雪浴ぶ溺れむと励まむと
フリーきつぶ青葉若葉を乗り継ぎて
シャンパンのしゅわつと梅雨の星増やす
レノン聴く梅雨の雫はしづく追ひ
リビングに不夜城ありぬ熱帯魚
手花火の膝下に小さき闇ありぬ
音叉にも似たる羽蟻の発ちにけり
アコーデオンの晩夏の夜気を震はせて
蛇口より終の一滴銀河濃し
身体髪膚月光に生け捕らる
掌の胡桃ふたつとなれば音生まれ

年間二十句

主宰選

中尾 公彦

ダム抱き山々の寝ね支度かな
かりがねは風の結び目かと思ふ
笹鳴や箒目は火に集まりぬ
さざなみのひかるや鷹の翼鳴る
擦れ違ふ毛皮に鋼の匂して
冬銀河地下シェルターのありどころ
冬夕焼褪せ新宿はメタリック
舶来の春寒かとも碇泊灯
野火奔り風の音域拡張をり

愁ひの歩花菜の風に掬はるる
眼帯の中のまばたき蝶の昼
惑星の配置につきし聖五月
黄砂降る海の上にも国ざかひ
夕焼のもつと先みてゐるきりん
水を脱ぎ噴水空に飛沫せり
黒牛に値の付き島の星祭
向日葵の一番星に傾ぎけり
キャンプファイア火の粉にもある翼かな
涼新たな皮膚一枚の象・麒麟
紅葉冷して水のごと山下る

沖作品



能村研三選

しろがねの落葉つくして朴頭てり

魂ゆくは螺旋のかたち秋蛭

鷹渡る誰より高く千社札

ひよめきにいま遠雷のかすかなる

一睡ののちたましひの涼しさよ

釣瓶落しそのまま闇になる母郷

一爆は錫杖に似て秋の山

黄落の母校や遠き安保の日

空襲に通れし林木の実降る

一句もて登四郎の弟子いわし雲

二天門潜りて秋の別れとす

晩秋の磁力真つ直ぐ大提灯

鱒酒に神事のごとき火を灯す

冬に入る簞笥に嵩の増すばかり

虎落笛あと靴音の乾きゆく

落鮎の沖の月観るまなこかな

埼玉

服部 早苗

神奈川

堀口 希望

東京

齊藤 實

埼玉

渡辺 鮎太

上空より庭ぢゆうの干し唐辛子
立冬の石ころの影濃かりけり
遠き代とつながつてゐる水鳥よ
燈火親し「沖」史の波形掌の上に
種のかげ葡萄受胎の透視めき

千葉

安藤しおん

干して濃き鱧子の朱と秋惜しむ
霜月鱗塗箸の先かしこくす
暮早し水木洋子のペン探そ
水底に起伏ありけり秋深む
鱧甲の色を研ぎ出す秋灯下
組体操見事にくづれ天高し
烏瓜落暉の芯をもらひけり
花嫁に逢ふ十月の日の匂
秋深く主人のいない身体かな
小春日の中にをり死を遠くせり
ささくれのやや深くなり冬来たる

神奈川

菅原 健一

沖作品 選後句評

*
能村研三

しろがねの落葉つくして朴顕てり 服部 早苗

夏の間大きな葉に緑を湛えていた朴の葉も、秋も終り頃になると、音を立てて地に落ちる。私の家の朴の木も、十一月の終りには、拾つても拾つても、二枚、三枚と地に落ちる。葉が大きいので箒で寄せ集めるわけにもいかず、殆どが手作業で一枚一枚拾つて集める。飛騨では、色づいた朴の葉を使って朴葉味噌などの料理にも使う。朴の葉は表は茶褐色に色づくのだが、裏はやや茶色味帯びたしろがね色をして葉脈を浮き立たせる。地に落ちる時は大方が裏側を見せるから不思議だ。寒さが一層強くなった朝などは、このしろがねの葉つばに霜が降りて、そのしろがね色を一層引き立たせる。朴の木は存在感のある木で、その一年の生命力にも感心させられるものがあるが、それだけに「顕つ」という言葉が相応しい木でもある。

釣瓶落しそのまま闇になる母郷 堀口 希望

「釣瓶落し」は、夕陽の沈み方の例えで、秋から冬の日没はあつ

という間なので、昔の人はこのような洒落た言い方をした。最近では「釣瓶」そのものが余り見られなくなってきたので、この季語も通用しなくなるかも知れない。作者が詠んだ故郷は、幸いなことに今でも都会化されず、日が暮れてしまつとどつぷりと闇に包まれてしまつところなのだろう。まだ、この母郷には釣瓶そのものも生きているのかも知れない。

鱸酒に神事のごとき火を灯す 齊藤 實

虎河豚の鱸を干して焦げ目のつくほど焙り、蓋付きの筒茶碗に入れて熱燗をたっぷり入れて蓋をする。しばらく置いて蓋をあけてマツチで火を点じると青白い炎をあげる。アルコール分をとばすためだそうだが、養分が琥珀色に溶出し独特の甘味と香気が立ち酒客を喜ばす。ややシヨー化したしぐさであるが、これを神事と見立てたのは類想がない。神事といえは必ずというほど火を扱うことが多いが、酒を飲むことも神事としてしまつおもしろさがある。

遠き代とつながつてゐる水鳥よ 渡辺 鮎太

平安時代の「大和物語」の生田川にまつわる話で川に浮かぶ水鳥を射当てた方に結婚させようと言つたところ二人の男たちは、一人は頭を射抜き、一人は尾を射抜いたので娘はますます悩んで川に身を投げてしまつたという話がある。この句もこんな話を踏まえての句なのかどうかはわからないが、鳩などが水に潜つてしばらく時間が経つとその水底には遠き代があるかも知れないと思うのもおもしろい連想である。

(以下略)